蒐玖波集

十二

2110
4

特
門 へ利 5
號 210
卷

蒐玖波集

卷第十二

雜連謌一

建保五年閏庚申對連歌

倉持氏印

後鳥羽院御製

ふるさとの山ゆふこえて

年をへて

卯言をまつ人もあれ

後深草院少將内侍

春風平谷丈小川もろ解そ
妙 妹烟平松もひくもの

吹こす清野へ余る道ふく言そいつ
春雉野へ余る道ふく言そいつ
く梢冬岡ひ仿彦小秋の野里を
中と答考野里を関
秋乃野里を関
小松内大臣
春なき小わ
志ゝを関 道行の山伏の市年

ゝゝ人しらに

見こゝせゝき
立ゝもこゝつぬ言乃ゝす

般涅槃の
埋木妹枝そ波乃春きそ
杉ゝ年そ春そいゝ陸
素玩法師

冬毎年立ゝの春ゝ妹衣水のあや

神を
春日野のむくの
二像院御時
中宮
女房
梅の
花の中
関白前左大臣
二条院讃岐

咲梅や彫をさまる匂ふくん

時そらし名も寺好行ひと侍ふ

二月や夜中のとしも好浦乃あけがの

ふきおろし

源宗氏

誰ゝ里年咲や味ふ兼ふわかん

兼ふむらしの名ほゝり乃

救海法印

ゑめるとおもひぬ月もおぼろふを

後光明照院前関白
法大臣

老の涙うつふしきも好あいせうふもかきけ

導誉法印

幸くふおく芳ゝ色の行ふかく

素阿法印

柳ノ葉ニ琴ヲ弾ク名ヲ有ル
男士ガ弥ノ畑ヲ打ツ音ヲ聞ク

山ノ奥ノ野ニ出デテ
立ツトキキケリ

名好ノ琴ノ上手ノ
カ――ニキ人ヲ
家ノ法印

前大納言氏
二尓法親王ヲ
ウキ世ヲ
関白九大臣

夕小雲山もこゑもひとつを

藤原高秀

月出ぬときハ梢もおなじ秋

月のいる方ハ峯の一こゑ

鮫のあむら法師

出ぬ日の数や月をおしむらん

丹治政織

義乃

ありなのこやま

ゆふ雲を

山人の

野句史小野の人日哉を

阿著梨とをんや作

おもひいくとせの春

権少僧都特宗

暮年ぶを老のなみだのつゆ
むら〳〵ぬれて春くれにけり

老ぬれば花のもとをぬれぬ木の
春ぬれてくる夜の雨

藤原貞直

あさくらや里ぬる春の
あけぼのゝ鐘の音

神尾清

春ぬれぬ夜もなのくれ
世中ぬ思ふ事ふかき

藤原時綱

春ぬれぬ老のねざめを
多くなくうぐひす

花の頃こゝをかせぬ
関白さき大臣

紫乃戸

山里の花ゝを雪もよゝ

二品法親王

ゝ枝なるきゝをこゝろかけ

花の頃法勝寺ゝ

導師法印

ゝふる袖のゝ色のゝ

いとゝゝ色のゝ

前大納言為世

雨の衣ゝ

おもゝのゝ

一枚の花ゝ

山ゝみ

源氏光

かあめうも花いまき㐂め楫ゐる

なごのくしきみそ吉のう妙歌

山うす尾上妙花を

ゐうあ㐂を吉くこそ

義年このなうふ

細代のうへも浪そよせめ連

同油法印

権僧都於長谷

敬心法印

小車年花年

なのも法うみを

救濂法印

風うに花をのこす木ずもと

文和五年三月西方精舎花

見作うをゐ歌連歌作年

叶う法うふのうへいきのふを

関白太政

二夕なもし出もし夜の夕著
杉風い時谷うきとてもへ冬も
笈の底の筆ら取ると敷うさうう哉
公もなくて寺や行覚
影う蒜のうきを蕎京軟孝
かうひちをと雪るうを猩も鉢り魚

さうう影しく髪阿法印
寺一时いなを池のかうを
蒜影ト夕こ冬ふうきてを相阿法印
うふのうきい一夜なり牛
花の散う山の寺ふさうの庵 牡道法印

雪もよ

とよ(の)の義の如き里人あまたゝ
見好賀も別(れ)あるかな

新しい雪と朱の義敷を
名残あるかな京好跡かな
権少僧都能算

神貞嗣

春京重宣

而霧かゝるかな
庭のまこゝもたのまれぬ

散ぬ間の花と毛毛志
会と云ふもおろかなり

人ごゝも花ゝさきぬ世の中
大中臣国親

春もいまはの(と)れの鐘

山風の毛あ法里妙夕ゝ

弘安二年八月九日社奉納の獨吟

百韻の中ゟ法印宗意

山さみゝ敷へきかたを数ゝる

紅葉乃風も社風もゆくらめ

法印宗意

松濤法印

関白前左大臣教嗣

准后行乃

誰年おしなべて春い行ゝ

大江成種

人毎妙神のさゝ乃名なとめ

仰のなきこゝ乃夜ゝ

法印融海

この事を沸ゝ法里妙乃月

毛ふかく毛おおいつまる

か詠き鼻ふ毛胡蝶のごとき

おもひ出多き湘南

和尚

人ふ如来の扉ふまをいたし

叡慮清浄

山ふのけふかきロもと

さくらを殺ぐ跡のおもみ

永然清浄

ホのおそい季山ふ毛峰ふ

ふふ毛妙高山ふ

おき臨老

剃ろ一老ふ毛

導栄清浄

叡海清浄

叡慮清浄

永然清浄

称西上人

おゝ　各々もまいられまいか　す

源頼朝卿胡臣

ふたゝび行もまいりたし

畠山重忠

時日まちまいらせの　敗滅せんやまいくまいらせ

あらまほしく後乃まいらせ

源義経

敬まいらせ候乃ちなり

源頼氏

ふもきく　八おお社頭まいりたし

毛利左近将監

毛利左近将監

導師法印

柴北戸平まいらせて人参かし

各をもちまいらせ後もまいりたし

孫原文雄氏

老こまで　たゝ　き　まち　わび　別　き路

うちふし　聲　わ　ら　ん　と　も

此　ろ　を　そ　う　ふ　ひ　と　ふ　名　の　ろ　を

む　こ　の　ひ　の　里　て　人　や　わ　く　ら　ん

ゐ　を　ま　川　山　ふ　く　き　ら　ん　た　ゝ　き　と

夏　わ　う　ち　ふ　も　き　ろ　を　か　ら　ふ

枚海法印

まち　得　ら　ま　き　て　ぬ　ら　夜　乃　時

ふ　わ　ふ　神　の　ら　玉　ふ　み　を

祐阿法印

雪　庵　の　軒　を　法　ふ　さ　ら　て

初　夜　の　受　む　し　歩　け　ら

源親光

梢　の　白　を　神　て　の　こ　き　る

宗阿法印

高倉院の御時百首の歌たてまつりけるに
ふるき跡つのくにに侍りけるを五月やみに
侍りけるまゝにおかくほとゝぎす

時鳥雲井年ふる名をもあくらむと
待ちぬらん

後法成寺大臣

ほとゝぎす月のかつらの枝ならし
ふかき夜ごとに声のさやけき

後三位教政

ほとゝぎす待ちし夜ごとの声ならし
ふかくも月のかたぶきにけり

大中臣憲宗

ほとゝぎす待ちし夜ごとの声ならし
夏なき国も月ぞ残れる

常智法師

ほとゝぎす月やの上にしばしだに
待ちぬる人のかげもこそなく

法印禅場

おもこなる水の月を涼しき

加せさのとこ義さるしかな

為面平松の蝉乃幹まぜる　蕪東濱顕

松風平添しき滋を聞きつる　平重将

夕野山寿蝉乃幹く

俤人のうき恋のいろうん

蝉のおもくへなるぬ日いなし　導誉法師

あさめ窓の白雲消ぬ　前中納言為忠

蚤の栄も文字のこ乃ち

ひとつ〳〵寿さき立てあそ

俤一身を夏あらぬ雲のくひく　関白前左大臣

車をこゝろよくひかせ

夕日のさやかなる
讀誦乃ち
穆まく草いほ
ふるけもの
舟人のもろ
月下なる

相阿法師

存阿法師

良阿法師

山風のまき
ゆるやかなる
一夏の夢

蕪亭宗箕

道栄法師

おりの秋

老の身い人ら
関白内大臣小侍一時家の千句ふ
おくなをまくふ猶も遥きふ
ふもむっしの秋ろ々ふ
なを月ろんらふのこふあう法きふ

関白左大臣

家の名ふて

般涯法印

源氏頼

うきふふうきいつと秋をもふ女身ふ
うきふふうきをふ名ふや恨ろん

誠智通意

老妙々ふ
名の上ら
川雪や柳の
うきるも吾ろもふつき秋雪ろ年

秋風ふく

寂光法印

少毛不風
いくき乃月毛住
波三保松乃
人多秋
おく霧や
秋の頃かひ
三手折内ふ
毛少加いふ
白霧のおく
と作ふ
毛の色
う一ふ秋
紫乃色の

藤原長泰
藤原親秀
ふ作ふ男乃
ふ作ふ
不知
ふ
あとゝなん
神の森乃
大江成種
菊乃毛を

雪庵や山のいつくも通ふらん

藤原定頼朝臣

杉千劇そそるあき風乃幸
ひろひめてつさもちるなゝ公ゝ京

常盤井入道前太政大臣

老ぬなるふ月をなこの名こそ
杉千のおと秋の一ら清水
ゝゝ人不知

山のもとまち清のもとゝ月出る
まゝ時雨ふ秋をおくらん

藤原永験

むらさめの志行月のうつる迄
住人もなき里ひさしきそ

藤原為頼

深山千年月見る夜まもなくなき
世を経ゝ秋住山のこのくまゝ

月 [illegible]
身は秋なれど神をぞ [illegible]

あくまでも心の [illegible] 月の先ぞ
住なれし里の秋やは [illegible]
うこの後も後もまた [illegible] 世の月

源有方

岸のやどもる [illegible] 住くらべ

権僧正良喩

おもひあれば身ぞ [illegible]
身を秋の心ぞ [illegible] 秋の月をぞ

性道法師

うき [illegible] 世の [illegible]
導 [illegible] 月次の [illegible]
八幡 [illegible]

箱崎や昨日おもひ今日の月のかなしさを　　殺海法印

出水の戸さしこめて世の秋ものこすなき月を見しかな　　前中納言匡光

このくれ春霞まてるもろこしも　　藤原家基卿

いつくをも松ぬ光やのこるらん　　源頼基

月千年のこる所山ゝけもなし

舟山底湯もる音の霧晴て　　如千法印

月のしろ玉ゐる水のやまかつら　　如千法印

むら雨かもろこしぬ音へ　　道朝法印

月や庭野中の清水この外こそ
蕎のみ山やなれ時雨こ
　法印那詮
時雨こそ月ふいこそ新もな
　そもあ庭の荻の高妙ほし
まこえ秋の月乃こ後まこ
　海勘宗信
あも人いく年荻の物屋里

巖導法師
月高里寺ふ妙秋やおほろ
庭ふ荻屋ふ相の家の面
　宋阿法印
山里いろけの中なる月をこそ
少毛ふ住しい古郷乃秋
　大江成種
柴の戸を淀世の月の当こそ

蟬のなく音もかすかになりきく

素行法師

索居の秋の日ぐらし独居るさびしさを誰かしるべき

さき草加りきをけふ水の月

谷のこゑ〳〵ちらし野川

救濟法師

志賀山寺にて夜鐘を聞く

鐘をきゝ詩覚の後も更ぬ

月をと秋の二夜

禅阿法師

秋やたくらを重ねの後まおもふ

昌信法師

杉年ふけ乃法きのこけかのうもれあるの月

人毎年祢覚ル秋ハ
たゝなくも猶しき人
老曽我寒き袂の
秋寒き神ろ深き年の法をぬる
法師ハ
後深草院北面
志ろ
きぬ〻ろ
乃書ろ

嘯の男女羽客
ひく人あま
なく鳥あ
舞ふを浪の
うへ雲あ
はしまる

前大納言忠
二郎法親王
一法ら
もろ

うき心秋千のの
あかさ月や
人いむうし
朱雀院のう
人の許
哭いまる

葛原後拾遺
尊法師
秋いかゝ
まさせの
秋の暗
あしかあ
夕景

いく年[illegible]
萬葉集を[illegible]

[illegible]
佐保川の水[illegible]
[illegible]
かはづさい詠ひとを[illegible]
[illegible]
[illegible]

壬生忠見

[illegible]
[illegible]
[illegible]

惺ホも言ぬ
ロの外なるもの

秋の月のさやま

三善仲久

菊をのこす老かな

権律師源義

秋ちる

和歌あはれをそふるやかまのこゑ

真阿法師

菊をのこす老かな

記頼兼

旅千載 秋の心あはれ

俤人の柄と

信濃法師

千とせの菊の

ふる年の後の菊きけいにふるけくく

彩雲和歌の老と

従二位家隆

うら玉ぬきうち山乃秋の一もや
夜半乃きぬ〳〵ふけ行里の雪

きのふ今日秋の哀のうち積き
新雪つきそふのかけうの枝なり

源信詮

西も東も里の秋やのこり一
あら〳〵し風を待くる雨

法眼良澄

数多里の秋のあはれの浅茅生ら
月乃ひとつ宿をかくの雪

大中臣種員

老ぬとて名ばかり秋をのこしき
板葺小野社壱千句一巻時

こうきもはふりむすこき時迄ら

素阿法師

十月下旬 秋のこらし

源氏物語巻の名と古今集作者とを

賦物ゲーム 仕りける歌の

初霜の

時雨なとひろの

山のうみをもみちさせ

月もろく歌 はまかふ氏と云

前右幕内 みる

のさとの秋をも

藤原助夏

降りの夕時雨

道半法師

木枯も

頃もしらぬ風の音

海部家信

数の法木枯も風を

すきこそ木枯水

山川の木枯をとをるす

人不知

こいとを思ひ於める秋な野辺

未未の風芳ふ夜ふかも

野の名手おふ高良の古郷

二條院讃岐

風の庭ふも萱の葉をあら免

いくよまで高の峰こえ

関白前左大臣

散海法師

みちやこめ一度ふ高ふ招く出の野辺

空年冬更の月いるこそ待

水

やふふいきふ氷手ふら免

出釈年法もあるやさふ

西行法師

雲年跡あは法道の主仲

行い雪あ法山下乃ふ

法眼基善

家居の小野
波をそそ　　本院侍従

月みれば
池水年な　　源親道

水やそ
あふぬ

あいち好
みけ行まそ月と水そ二ちそ
月の水年もそのふ
　　権少僧都永運

あいちの園や波のそ宮
　　昌信法師

そしそいち池そ
白きそそ雪のそふ二そあふ
　　中原恭實

月寒き浦の跡乃夢ハしき
高松乃雪ハ幾重ともなし
道光法印

ふさもきひろ
りこぬ竹の湖氷ふる
ふあらそ
河舟を氷乃手さし
公あらそ

よそ人ハ知

深ゆ年暮ぬ
人のくそ

蒼京信房

ゆきまくまふ道ミ我なき庵の雪
清行舟乃手さむきうら風

三阿法印

杉ふきおろし

祐阿法印

仏木こ法山路いそぐ日暮ぬ

紀宗基

雪ふかく谷のかけ道せ
ふ手出法ゐのこゑおそけき

西仏法師

雪晴て杉ふかき山路ふみ分ぬ
山ゆき道ふみ分てまふ人

平重時

先ふもひとすぢ(みち)もこす雪のうへ
主ぬの日ふもとの岡の朝ぼらけ

神真資

雪をうもまだ枝々のこりもら
ぬまもあるまで世こそ後遠

北條政村

掃ゐあいふ雪やおまへ人當の井
号ばうまでや夕朱雀

降る雪や明日も踏みわけの杖もなし

一筋なせる人の跡かな

雪あるもそれもこの世の時なるを

庵なる窓も雪の山乃色哉

二品法親王

雪ゆゑに明日あるべき月もあるを

遵峯参法師

雪のこと思ふべき寺

小野のあるじ

雪のうち春待つ事もしらさうし

前大納言為家

柵をゆふ人も道もあるなれ

藤原知春

水もなき氷の上や雪降らむ

藤原長泰

江平淡なく舟少や雪のまゝ

舟を捨てまゐ行まゝ

原京の深山の雪おひまゝ

十佛法四